

看護学実習における形成的評価の一考察

—— 統合看護実習の学生による中間評価から ——

A Study of Formative Evaluation in Nursing Practice

—— Intermediate evaluation by students of integrated nursing practice ——

下川原 久 子

抄録 統合看護実習において中間「自己評価」から実習目標達成に向かう学習支援を通じて、より効果的な評価活動ができることを目的とし、61名を対象とした結果、中間「自己評価」における実習目標の意識づけは高まり、＜評価項目到達不足の認識＞に気づくことができ、2週目は＜評価意識と実践＞により実習を経過することができた。実習において自己の到達度を総合的に評価することについては、高い評価を示しており看護専門領域の最後の実習であるという自覚が見られた。今後、形成的評価として継続的に実施していくことが学生の自己評価力が高まると推察された。

I. はじめに

看護学実習における学習成果¹⁾は、個々の学生が実習目的・目標をどの程度達成できたかにより表される。そして、その評価基準は実習の目的・目標であり、達成度は評価表の各項目として点数化され総合点が学習成果となる。評価活動は、診断的評価・形成的評価・総括的評価の3つを基本形態として、段階的に展開することにより目的・目標に到達することができる。最近では、学びの質に注目した形成的評価の重要性について指針を与えて

くれるものとして、ルーブリック評価^{2,6)}による有効性についても研究が行われている。形成的評価は、教員と学生が共にフィードバックを行うことができる評価活動である。本学における統合看護実習の実習評価は総括的評価により行われ、その方法は、「学生評価」と「教員評価」双方である。統合看護実習は最終段階の専門実習に位置付けられており、学生の主体性が問われる実習でもある。しかし、総括的評価のみでは学生の目標達成状況

の経過が把握できにくく、学習成果を期待できる評価活動として形成的評価を、学生による中間「実習自己評価」（以降、中間「自己評価」）として併用していくことが必要であると推測した。形成的評価によるフィードバックを重視することにより、学生は自身を適切に評価し自己評価力を高められると考えられる。自己評価に関する研究ではその効果について、「患者理解」・「基礎能力の育成」・「気づきや考える力」⁷⁾「目標の確認」⁸⁾など報告がなされている。舟島ら⁹⁾は、自己評価は自己教育に結びつくという点で重要な機能をもっており、自発的・自立的に行われるため

に効果が高いとされている。梶田ら¹⁰⁾は、評価における形成的評価について形成発展する段階において行われるものであるから、その過程を改善するためにそれが用いられるようにあらゆる努力がなされるべきであると強調している。本稿では、総括的評価に終始することなく形成的評価にも視点を当て、学生の意識が実習目標達成につながる思考ができたかその現状を知ることにある。そして今後、形成的評価を行うことで実習目標達成に向かう学習支援を通じて、より効果的な評価活動ができることを考察した。

II. 研究目的

統合看護実習において形成的評価を併用することで実習目標達成に向かう学習支援を通

じて、より効果的な評価活動ができることを目的とする。

III. 研究方法

1. **研究期間**：平成28年10月～11月
2. **対象**：短期大学3年次統合看護実習生61名
3. **倫理的配慮**
 - ・本学研究倫理審査規定に則り、記録物に関して教育的指導として扱った。
 - ・学生には、記録物の実習自己評価（中間「自己評価」）、最終「実習評価」と中間「自己評価」意識調査を研究使用することに対して、拒否しても成績などに影響することはないことを説明し同意を得た。また記録物は、研究以外には使用し

ないことを説明した。

- ・統合看護実習指導教員に説明し了解を得た。

4. 統合看護実習の方法と実習評価の概要

統合看護実習の目的の要点は、“複数患者実習”、“看護管理者実習”、“自己の到達度の評価”の3つから構成されている。実習内容は2週間の中で、「看護管理者実習」・「複数患者実習」・「フリー計画実習」の3つの構成の流れで実践されているが、構成順番は実習施設の病棟の流れの事情に合わせている。そのため、「実習目標3と4」については順

番が入れ替わることがあり、中間「自己評価」ができる評価内容とできない評価内容がある（表2）。「実習目標4」については評価項目要点の「1」では、「事前の計画」のみは課題が必須であり事前指導が行われるが、他の評価項目要点2）～4）の3要素は臨地実習（以降、実習とする）2週目に組み込まれ、1週目に経験できない学生が多いことから中間「自己評価」の対象から除外した。また、指導教員は学生の実践を振り返りの記録物から指導を行うことが多く、そのために記録物の内容は学生の学びおよび実践を理解できることが基本である。

統合看護実習における実習評価は、学生の自己評価を実習指導教員と科目担当教員が他者評価する。中間「自己評価」については実施の確認と、低い評価点（3未満）について指導を行った。本稿での研究内容は学生の捉え方に焦点を当てている。

5. 研究方法

(1) 実習評価点の比較

- ① 1週目最終日に中間「自己評価」を評価基準に沿って行った。評価基準に従い、評価点平均3点未満を低い評価とし、3点～3.5点未満について努力を要する評価、5点を高評価とした。人数が少ないため統計的処理は行わず、Excelにて単純集計した。
- ② 2週目に最終「実習評価」を5段階評

価した。その後、1週目の中間「自己評価」と最終「実習評価」の結果から上記「①」の視点で実習評価項目を考察した。

*評価基準は、「5: できた / 4: 少しの指導でできた / 3: やや多くの助言・指導によりできた / 2: 助言・指導を多く必要としなかなか出来なかった / 1: 指導・助言を受けてもできなかった」とした。

(2) 調査内容と分析

<質問事項と回答方法>

① “1週目で「自己評価」をしましたが、2週目は評価を意識して実習を行うことができましたか?”について、「はい」「いいえ」の回答を得る。

② 「はい」「いいえ」どちらも理由を書き、また中間評価を行うことについての「意見」も書く。

<調査分析>

① 質問事項で得られた回答の分析は単純集計した。

② 「理由」と「意見」は文脈に沿って整理79コード抽出した。それらをカテゴリー化、サブカテゴリー化した。要約は類似文脈を括弧にコード件数として示した。

(3) 分析の信頼性を高めるために、文脈の熟読と繰り返しによる確認及び学術研究者のスーパーバイズを受けた。

IV. 結 果

1. 中間「自己評価」の意識調査内容と結果（表1）

1) 1週目に中間「自己評価」を行い2週目

は評価を意識して実習できたか。「はい」「いいえ」の回答は以下の通りである。

「はい」: 57名 (93.44%)、「いいえ」: 4名

表 1. 中間「自己評価」意識調査

カテゴリー	サブカテゴリー	集約
評価項目の認識到達不足	評価項目の一部に到達感不足を感じている	・見直すことや不足している部分分かる (28) ・達成すべき評価項目や未達成の評価項目がある (2)
	低い評価項目がある	・低い評価項目がある (4)
	評価に意識が向いていない	・評価を意識して行うことができていない (1)
		・中間評価を行っていなかった (1)
	出来る評価とできない評価がある	・1週目に評価ができない項目がある (2)
評価意識と実践	目標達成度や学ぶ視点の意識ができた	・評価項目の不足な部分の確認や意識ができた (22)
		・実習目標の達成確認や意識付けができた (6)
		・実習内容の再確認、不明なところの検討など積極的な学びができた (4)
	・学ぶべき視点が意識できた (3)	
不足部分の実践ができた	・不足なところやできていないところの実践ができた (6)	

(6.56%)

2) 中間「自己評価」の「はい」「いいえ」の理由に該当する記述は、「中間「自己評価」意識調査」に示した。「はい」「いいえ」に共通した理由は、＜評価項目到達不足の認識＞と＜評価意識と実践＞の2カテゴリーを抽出できた。＜評価項目の到達不足の認識＞についてのサブカテゴリーは4コード【評価項目の一部に到達感不足を感じている】、【低い評価項目がある】、【評価に意識が向いていない】、【できる評価とできない評価がある】であった。集約は6コードから構成された。＜評価意識と実践＞についてのサブカテゴリーは2コード【目標達成や学ぶ視点の意識ができた】、【不足部分の実践ができた】であった。集約は5コードで構成された。

*用語の定義：中間「自己評価」は、1週目に行った実習評価である。最終「自己評価」は、実習最後に行った実習評価である。

2. 実習評価（中間「自己評価」、最終「自己評価」）の結果（表2）

中間「自己評価」では、平均3点未満が1項目で評価1-3)、平均4点以上が2項目で実習目標5-1)・4)であった。3点～3.5点未満は9項目で評価1-1)・2)・4)、評価2-1)・4)、評価3-2)・3)・4)、4-1)であった。最終「自己評価」では、3点未満は9項目で、評価1-1)・3)・4)、評価3-1)・2)、評価4-1)、3)・4)であった。4点以上は6項目で評価2-2)・3)、5-1)～4)であった。最終「自己評価」では、全ての実習目標において平均点が上昇していた。自己評価を5点で評価した学生は、評価2-2)は23.53%、3)は45.11%、評価5は、5-1)は80.4%、3)41.2%、4)39.3%、5-4)は78.4%の学生が5点で評価していた。5点評価が無い項目は、評価1-1)・3)・4)であった。全体で見ると、平均点は上昇していたが個人で見ると、低い評価項目が3点以上にレベルアップされていない

表 2. 実習自己評価の結果

実習目標	評価項目要点	中間 3点未満 (人)	中間 5点 (人)	最終 3点未満 (人)	最終 5点 (人)
1. 健康障害をもつ複数の患者に対し、安全・安楽を重視した実践を通して看護管理の理解ができる。	1) 治療・看護を述べる	3	0	1	0
	2) 援助の優先順位を述べる	3	0	0	5
	3) 看護問題の根拠・援助の方法を述べる	9	0	1	0
	4) 回復過程を述べる	7	0	1	0
2. 看護実践を通して、看護チームの一員として看護の役割と責任を理解し、自覚ある行動をとることができる。	1) 援助の実践ができる	6	1	0	1
	2) 時間管理・安全管理ができる	0	2	0	12
	3) 連絡・報告・相談ができる	0	11	0	23
	4) 論理的側面の実践ができる	3	3	0	6
3. 看護管理者実習において看護管理のしくみや機能の実際を知る事ができる。	1) 看護部の組織、病院機能評価を述べる	1	1	1	3
	2) チームマネジメントを述べる	3	2	1	5
	3) 医療機関の管理体制・看護管理の連携を述べる	2	2	0	6
	4) スタッフの教育的役割を述べる	2	1	0	7
4. 看護チームおよび他職種医療チームの連携、協働の実際を体験し、その役割を理解することができる。	1) 「フリー」計画立案ができる	3	1	1	7
	2) 自己の学習課題の実践ができる				2
	3) チーム医療の連携・協働を述べる				8
	4) 「フリー計画」実習から今後の課題を述べる				6
5. 看護実践を通して、自己の到達度に総合的な評価ができる。	1) 礼儀をわきまえた実習ができる	1	28	1	41
	2) 主体的な実習の実践	1	9	0	21
	3) メンバー内で自己の役割の実践	1	8	1	20
	4) 心身共に健康調整し実習に臨む	2	29	1	40

かった。

V. 考 察

調査の結果、中間「自己評価」について“1週目を2週目に意識し、実習を行うことができた”と回答したのは93.44%であった。ほとんどの学生が自己評価を意識し2週目に実習できていた結果となった。本稿で実施した

中間「自己評価」は、形成的評価と位置付けることができる。梶田¹¹⁾は形成的評価について、学習者に対して教育者がもつねがいとねらいを、またその実現の度合いとそれに基づく新たな指導と学習の課題を問題にするものであ

ると述べている。さらに、形成的評価は指導する側と学習する側にも論理が展開されるのであり、学習側では何をどのように学び、どのような結果に到達すればよいのか、といったイメージを明確にもつことを強調している。その結果、自発性・創造性などの主体的能力が育成されることでもありとしている。本学の統合看護実習では、実習中に実習要項の「実習目標」や「実習評価」の内容について、学生が度々確認し実習に臨んでいる光景があった。また、グループ間で意見交換をしている場面も度々みられた。このことは、実習目標を意識しその達成に向けて実習を行っていると考えられる。

中間「自己評価」の特徴は<評価項目の到達不足の認識>と<評価意識と実践>の2つの構成でカテゴリー化された。カテゴリー<評価項目の到達不足の認識>のサブカテゴリーからは、【評価項目の一部に到達不足を感じている】、【低い評価項目がある】、【評価に意識が向いていない】、【できる評価とできない評価がある】の4コードであった。まず、【評価項目の一部に到達不足を感じている】では、実習目標の評価項目は「理解」「行動」が問われる項目で構成されていることから、記録物では実習目標に適している実習ができていないことに、自身の気づきや指導で明らかになっている。その結果不足感をもっていることが予想される。また、中間「自己評価」を行う時点で目標達成レベルに到達できていないことを振り返っていることの結果であると予測できる。特に実習目標1では、「思考」が問われるところからも他の目標と比較し、自信となりにくいことも考えられる。【低い評価項目がある】では、中間「自己評価」を

行うことで自身の評価点を意識できることから、低い評価をレベルアップしていく対応を考えることが必要になる。中間「自己評価」点が3点以下の評価項目は、目標1-3) [患者の看護問題の根拠と、解決に向けた援助の方法を述べることができる]の1つの項目である。これは、「看護問題の根拠を考える」「援助の方法を述べる」という「思考」ではあるが、問題解決方法について強化される指導が必要である。統合看護実習は、実習の総まとめとして位置付けられており、主体的な行動が求められることでもある。梶田¹²⁾は自己評価により、学習者が目標意識をもつことと自己評価の能力と習慣を身につけていくことが重要であり、それが学習者自身の自己評価へと内面化していくことであると述べている。また、実習において活動時に生じた感情の度合いが大きいほど理性的な評価へと転換させるのは困難で、個人内の客観的評価にいたっていない可能性がある¹³⁾。不足なことや評価点が低いと自覚できることは、2週目にステップアップにつながっていくことが可能である。しかし、“低い評価項目が3点以上にレベルアップされていなかった”学生は一部であるが、学生の学習目標の到達と実践に必要な基本的能力の修得に向け十分なフィードバックができていなかった可能性もある。文献検討の研究によると、他者評価をフィードバックすることで、自己評価能力を高め、自己教育力を高めていく取り組みを行うことが課題としてあげられている¹⁴⁾。本学においては実習目標の意識をもつ以外にも、学生が考えられるようにフィードバックし、目標到達レベルまで引き上げることも必要である。【評価に意識が向いていない】では、人数的

には少ないが、評価を意識して実習できることが主体的な行動に結びついていくことが推測できるため、評価が意識できるように実習前教育が必要であると考えられる。【できる評価とできない評価がある】では、実習体制の影響があることにより、実習オリエンテーションにて評価について説明していくことが必要である。

カテゴリー＜評価意識と実践＞のサブカテゴリーは、【目標達成度や学ぶ視点の意識ができた】、【不足部分の実践ができた】の2コードであった。このサブカテゴリー2コードでは、1週目の振り返りから最終評価に必要な評価項目に意識が向き、意識でとどまることなく実践の努力が伺える。高得点は、5-1「礼儀をわきまえた実習」、4「心身の健康状態の調整」の2項目であり、実習態度については近い将来の看護職者としてのイメージや意

識が感じられる。また、低い評価3点以下は総括的評価では3点以上に改善できている。

以上から、本学統合看護実習における学生による中間「自己評価」では、ほとんどの学生が自己評価を意識し2週目に実習できていた。実習形態が見学と一部介入という方法であるが、豊富な知識と技術が要求される中で、主体的に考え実践するという反復の性格の強い統合看護実習では、看護専門領域実習の積み上げが重要であると考えられる。実習において自己の到達度を総合的に評価することについては、高い評価を示していた。礼儀、健康意識と行動については医療職を目指す者としての資質でもあり、自覚と行動ができるところは高く評価される場所である。今後は、中間「自己評価」を形成的評価として位置づけ実習指導教員のフィードバックの共通理解と指導方法を検討していくこと必要である。

VI. 結

中間「自己評価」における実習目標の意識づけは高まり、＜評価項目の到達不足の認識＞に気づくことができ、2週目は＜評価意識と実践＞により実習を経過することができた。実習において自己の到達度を総合的に評

論

価することについては、高い評価を示しており看護専門領域の最後の実習であるという自覚が見られた。今後、形成的評価として継続的に実施していくことが学生の自己評価力が高まると推察された。

謝

本研究にご協力してくださいました方々に深く感謝申し上げます。

辞

引用文献

- 1) 舟島なをみ、杉村みど里 (2012). 看護教育学 第5版. 東京: 医学書院. 261-265.
- 2) 石垣明子 (2016). 大学におけるルーブリック評価の開発—医療人文学科目における社会人基礎力を涵養するルーブリッカー—. つくば国際大学. 研究紀要 No. 22. 27-39.
- 3) 井内伸栄、小林菜穂子、田中希穂 (2015). 看護学実習を支援する学習評価システムの構築と評価. 大阪信愛女学院短期大学紀要 第49集. 39-44.
- 4) 古城幸子、木下香織 (2013). 老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価表を導入して. 新見公立大学紀要 第34巻. 15-20.
- 5) 沖 裕貴 (2014). 大学におけるルーブリック評価の導入の実際. 立命館高等教育研究 14号. 71-90.
- 6) 奥百合子、今井栄子、松尾尚美 (2015). 成人看護学(急性期)のアクティブラーニング型授業の評価. 城西国際大学紀要 第23巻8号. 13-24.
- 7) 藤田美恵、吉川峰子、蔵屋敷美紀 (2015). 看護学生の臨地実習における学習活動自己評価の実態と教授活動. 日本看護医療学会雑誌 Vol. 17 No. 1. 12-20.
- 8) 前掲げ4).
- 9) 前掲げ1). p 297-307.
- 10) B.S. ブルームほか編者、梶田叡一ほか訳 (1978). 教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総括評価—. 東京: 第一法規. 162.
- 11) 梶田叡一 (1999). 教育評価 第2版. 有斐閣叢書. 100-101.
- 12) 前掲げ11). 102.
- 13) 和田佳子、藤井智恵美、岸田泰子 (2015). 母性看護学実習が看護学生の描くライフコースに与える影響と看護学生による実習評価との関係—実習の満足度、技術経験項目、自己評価点との相関関係—. 共立女子大学看護学雑誌 2巻. 10-16.
- 14) 木下由美子、川上千普美 (2007). 看護学臨地実習における学生の学習目標達成度の評価に関する文献検討. 九州大学医学部保健学科紀要 第8号. 49-58.